



俳句雑誌[おき]

8月号

沖 発行所

点呼

能村 研三

諏訪湖畔

先日久しぶりに南信濃支部の指導句会で諏訪湖に行った。諏訪湖は昔から支部長の藤森すみれさんに案内していただいているので初めてではなかったが、梅雨時の情緒もあつて楽しい旅が出来た。

中でも諏訪湖の西側に位置する岡谷市を初めて訪ねた。ここは諏訪湖の湖尻にあたり釜口水門から天竜川が流れ出るところで、梅雨時で水量の多い湖の水を川へ音を立てて放流していたのが印象的であった。

岡谷には大網白里の小河原さんの紹介で「沖」に入会された宮坂秋湖さんがおられるので訪ねることにした。秋湖さんは岡谷駅からほど近いところにある立派なお寺である照光寺の前貫主の宮坂有勝さんの大黒さん。正面に立つとそのお寺の大きさは圧巻である。石段の両先には見事に手入れされた植木や塔に圧倒。岡谷市は製糸業で栄えた町であるから蚕霊供養塔がまつられている。

照光寺は真言宗智山派のお寺、創建は平安時代に遡るといふ名刹で多

緑 さ す 師 の 師 の 墓 も 比 翼 塚

水原秋櫻子先生墓前

海 南 風 扇 開 き に ビ ル が 建 ち

船 上 に 点 呼 の ひ び く 夏 つ ば め

リ ラ 冷 や 絵 硝 子 に あ る 物 語

優曇華に昔味噌屋の高櫃

十葉を抜くに躊躇ひごころかな

弓を射る無音の所作や天炎ゆる

千葉公園・大賀蓮

三日なほ雨に矜恃の古代蓮

散華して妖怪の目の蓮果托

蓮葉の葉脈倣ふ雨滴かな

(二部俳壇八月号に掲載)

くの文化財も有しているが、次男の副住職さんは仏画を画かれる絵師さんで、美術館のようなホールで「六道輪廻図」についてお経から繙いたお話を聞いた。

本堂の脇には、三年前に他界された前住主の遺影が奉られていたが、その傍に本山の智積院の第一世住主となった玄宥の像が安置されていた。

この本像は智積院境内の金堂前に建立されているが、それを一回り小さくしたもので、市川の彫刻家で日展評議員の久保田徹通さんが彫られたものであることを知った。久保田さんは私と古くから知己の間柄で「沖」の記念会のお土産にレリーフをお願いしたこともある方だ。久保田さんからも智積院に仏像を彫られた話は聞いていたもののこの像と岡谷で遭遇するとは思わなかった。

この像の制作にあたっては玄宥に関する資料が乏しく、軸に描かれた数少ない肖像画のほかに宮坂宥勝さんが実際に七条の袈裟を着てもらった姿も参考にしてつくられたという。

能村 研三

蒼茫集



炎とは

藤森すみれ

AB型の家

辻美奈子

緑さす切り株は卓椅子にもし
炎とは真水の如し躑躅山
一線を画く青田の風を身に
初夏の真白き翼ベイブリッジ
港の灯汲み上げ夏の観覧車
高層のホテルの癒し浴衣出て

太陽は垂直梅雨は水平に
梅雨長しなほ長々し傘袋
星まつり全員AB型の家
胡瓜もみお人よしでと叱られて
帰省せり遠国の子と詠まれしが
闇に浮く十葉の白忌日くる

ひすい色

吉田政江

淡くこそ

秋葉雅治

切り離す切手の鈍る走り梅雨
蚕豆剥くバイオリンケース開くかに
登四郎忌茹で蚕豆のひすい色
初夏の海風廻す観覧車
薄暑光12ノットの波しぶき
托卵の巢へまつしぐら時鳥

生き方の淡くなりゆくころもがへ
濃きは憂し淡きはすがし額の花
夏足袋の音なく進む橋懸
発想の湧いては抜ける籠枕
噴水の思春期といふ渇水期
白南風や高層・ヒルズ天を摩し

棘ある木 荒井千佐代

噴煙を雲と見紛ふ夏どなり
鍵盤の黄ばみ沈みも麦の秋
暮れ方の山低くなる桐の花
棘ある木とげ尖らせて梅雨に入る
夏落葉逢瀬道また獣道
西日中揺らぐ藻草や被爆川

心意気 淵上千津

立葵上むきて咲く心意気
偏西風蛇行す梅雨の物思ひ
ドライアイうすうす痛む麦の秋
名前負けせし十葉の踏まれやう
水打つて直線裁ちの木綿着る
くらげ群れ伏流果つる日本海

兜 煮 遠藤真砂明

黒潮に突つ込む舳先一気に夏
青梅雨の海へ多感な子の一語
近道の子に磯鳴りの月見草
サーフアーヘ一気崩れに屏風波
白玉のつるりと幼なことばかな
兜煮をどんと置きたる祭かな

次 元 田所節子

みなとみらい天へ涼しく灯を積んで
競漕のオール息合ひ水を蹴る
遠きほど白きよらかな未草
竹林の獣ぬさうな山の色
議論いつ次元違へし水中花
口あけて命まつ赤な燕の子

夏 椿 吉田陽代

在りし日の夫の真顔や朴の花
夏椿視力落ちしと気付くとき
探しものに淋しき汗をかきにけり
荒梅雨やにんげんの分知らさるる
肌のぬくみの時計をはずす梅雨灯
体育館の扉全開五月晴

門 限 千田百里

草矢射てみよ平成の少年よ
門限は破るためあり水中花
断捨離のひとつに野望ビール酌む
身を反らし反らしボートの手力男
天網の疎にして梅雨のざんざ降り
梅雨深し手も足も貸す物探し

でむし日和 楠原幹子

蚕豆を莢ごと焼いて白ワイン
曇天はでむし日和散髪に
茅花流し橋梁工事遅々として
溪流の息つぐところ山法師
枇杷熟るる中空に陽を引き留めて
箱庭のやはり故郷の景となる

時代の坩堝 千田敬

赤煉瓦悠久の刻ひめて夏
横浜は時代の坩堝サングラス
転舵して水尾は純白五月行く
忌に思ふ先師の笑みや海月浮く
十三日金曜梅雨満月赤し
端居して見ゆる世のあり人のあり

花づくし 大川ゆかり

リラ冷や足になじまぬハイヒール
かすみ草白磁にあはき影落とし
先生はずつと先生フリージア
緋牡丹のしづかに受ける雨の音

ぼうたんの厭世的なくづれやう
紫陽花や甘味処の混み合ひて

繋がる手 柴崎英子

柿右衛門の蒼あざやかに五月来る
玉葱煮る人間丸くなるために
自由とはいま絹莢の筋取つて
水流の勢ひ青梅太る夜
梅雨晴間フオークダンスの繋がる手
高く揚ぐ勝利の汗の堅拳

母国 久染康子

墓碑名ジョン海霧の彼方の母国向く
梅雨入前すこし夜遊びして来たり
子等が来る慮りつ放しの冷蔵庫
父の日の主役が留守居してゐたり
堰しづきに吹き戻さるる群れ螢
箱眼鏡海底いきなり迫り上がる

音の弾力 甲州千草

若竹の粉の豊饒白洲邸
バンダナの働きの者よ栗の花
シーバスの音の弾力青葉潮

星涼し発祥のもの多き地の
おうおうと風を抱き込み男梅雨
また度数強める眼鏡梅雨の月

桐の花 鈴木良戈

木場堀の深さ目測桜桃忌
桐の花かつて庄屋でありし門
海女小屋の声で膨らむ朝騒雨
師を訪ひしこの道えごの咲く頃に
青空や水張時の学校田
十葉や母へ煎じしことありて

籠 枕 大畑善昭

妻が歌ひ出す卵の花の一枝活け
白寿翁にこにことゐる簞
草を抜け出す蚯蚓にも仔細あり
紅蜀葵空気自在にしてゐたり
籠枕五体を宙におく思ひ
異次元へ立つ梅雨の夜の巨きな木

更 衣 河口仁志

晩年は亀にもありぬ鳴けるなり

松蟬のもう鳴く頃ぞ登四郎忌
日に三度地震のありぬ霾ぐもり〇
忘れ得ぬ人の記憶や更衣
澱みなき大河の流れ夏来る
梅雨に入る九十九里浜肅肅と

月に濡れ 北川英子

和毛ふはふは空浮巢漂へり
帚木に佇み影の淡きかな
通夜へ急く青水無月の月に濡れ
形代をしかと重ねて流しけり
しをらしと言はれてみたき百日草
ジャンサポーター褥暑の塵を拾ひをり

飛 沫 湯橋喜美

ほととぎす言葉飛沫となりてをり
双り子の重ねて一つ麦藁帽
清女紫女無垢の手ざはり梅雨長し
取り残すどくだみ明り傘乾く
風にまだ耐へる柴折戸半夏生
句碑一基目覚め緑蔭抜ける風

潮鳴集

夏 菊

岡澤田鶴

真つ青に空は五月をぬりつづす
夏来る五歳の男の子反抗期
秋櫻子眠る夏菊白きこと
天地を均す神あり遠郭公
重力をふはりと躲し揚羽蝶

褒 美

七田文子

海の色空の色欲り七変化
菖蒲田の雨脚に色ありにけり
高階の水槽籠り梅雨の街
突然の褒美のやうに梅雨満月
晩年も多感たるべく土用の芽

青 嵐

石川笙児

高らかに祝詞のこだま山開
青嵐三鬼は鬼を貫けり



形代や水に流すといふ許し
特許許可局確かに宵のほととぎす
法螺少し加へし釣師鮎の宿

鮎の宿

峰

幸子

梅雨寒し赤信号は獣の目
万緑の底に真白きはぐれ球
酌むほどに人を恋ひけり鮎の宿
二重虹得難き残像目に刻み
甘酒を啜りて野心捨て切れず

起 点

浅沼久男

夕立が地球浮かせてしまひけり
裏返り裏返り蝶白くなる
尺どりの起点はいつも濡れてをり
煤臭き 竪穴住居若葉冷
山まゆの月の光の中にあり

沖作品



能村研三選

けもの道春の闇へと続きをり

女子会の小さき円卓愛鳥日

風青し括り売らるる「マルクス論」

あぢさぬや街並み蒼く暮れ残り

軒先の踊る白シャツ風まかせ

葉桜や日の斑の揺るる石の椅子

ルルドまで若葉トンネル潜りゆく

蝶番ゆるびし祠みなみ風

麦秋や畑よりのぼる薄煙

十字花庭に湧き出づ罪の数

いつよりと言へぬ晩年さるすべり

根廻しの効きたる会議目借時

遠き日の一丁倫敦春惜しむ

潮の香のふと入る車窓夏立てり

春望の塔に偲びしきみさらず

千葉

神戸やすを

長崎

福山 和枝

市川市

塙 誠一郎

(大東津路行)

一息を吐いて無風の鯉のぼり

葉ざくらの影の深きに停留所

馬車道に異国の香あり若葉風

はつ夏の雲の白さに巨船浮く

演奏の余韻にひたる薔薇の雨

手囀りの指間に透ける蛍の火

蟻の穴本家分家のあるらしき

七十路の坂若竹の勢ひ欲し

髪きりり結うてこれより三社祭

身軽さの裏の空しさ水中花

角帯をぼんと叩いて宵まつり

波ごとにまるぶがうれし桜貝

鯉のぼりまだ登りたき尾の力

過疎村に置き去りされし蟬しぐれ

混迷の世に道いくつ道をしへ

東京

磯貝 尚孝

千葉

岡 真紗子

アズリカ
イスカ
ローチ

鈴木 一広

沖作品 15句選評

*
能村研三

風青し括り売らるる「マルクス論」 神戸やすを

神戸さんは私と同じ団塊の世代。学生の頃はひたすらマルクスの「資本論」を読み耽った時代があったのだろう。しかし社会に出て企業戦士としての時代を送った。書棚の片隅に捨てずにあつた「資本論」。二十世紀末のソ連の崩壊、共産主義の敗北以後、マルクスの威光は急激にさめていった感がある。学生時代のある一時マルクスにかふれた時代が懐かしく思えた。自分も若い時代があつたのだと思いつつ、紐で括り古本屋に売ることにした。

十字花庭に湧き出づ罪の数 福山 和枝

十字花は正式には四枚の花びらが十字状に配列するもので、

ナズナ・ダイコンなどアブラナ科植物を言うようだが、ここでは「十葉」「どくだみ」のことであろう。花壇のあちこちに逞しく根を張り繁茂するどくだみには辟易する時もあるが、花の純白を見ると愛しくも思える。どくだみの強烈な匂を嗅いでいると、法律的な犯罪のような罪でなく、宗教的な聖書が教える人間のいくつもの罪というのが頭に浮かんだ。

いつよりと言へぬ晩年さるすべり 塙 誠一郎

「晩年」という語は故人の死去前の数年を意味するはずの言葉で、自分が年をとったからと言って使うのはおかしい。あくまでも自分が使う言葉ではなく、その人が故人になつてから、故人の業績などを言う時に使うのが本当のようだ。自らの余命など今からわかるはずもないからである。さるすべりは長い間に咲きつづける花なので、この季語の幹旋は面白い。

一息を吐いて無風の鯉のぼり 磯貝 尚孝

つい先まで、緑の風をいっぱいいらんで、元氣よく泳いでいた鯉幟だったが、山峡の風も止んで無風になつてしまった。鯉幟もホツと一休みをするのか、一息を吐いて垂れ下がってしまった。鯉幟をあげるのは春の強風が途絶える時期だ。たいていの時間は、だらりとぶら下がっていることが多い。勢いよく泳げる風の到来を期待しながらも、作者の鯉幟に対する、やさしい眼差が一句に描かれた。(以下略)